

*Archirrhinos
haeckelii*

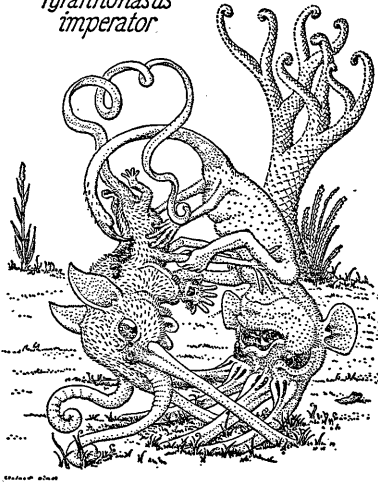


ヘッケルムカシハナアルキ

単鼻亜目・ムカシハナアルキ科の一属、鼻行類のなかでは一番原始的な種類でトガリネズミ（食虫目）に似ている。鼻器は未分化で、下面の粘着液で地面に固着し、四肢を使ってゴキブリを捕食する（原著第II図）

*Nasobema
tyricum*

*Tyrannonasus
imperator*



ヘーペラーオニハナアルキ（右側）、オーナゾベーム（左側）多鼻亜目・四鼻族に属し、いづれも鼻が四つに分れている。オニハナアルキは、尾端の毒爪でナゾベームを刺して倒し、捕食する（原著第XI図）

鼻行類の発見?!

蒲原 春一

現在、地球上で知られる動物は約百三万八千種強とされ、これを大別して二十三の門とよぶ単位に分類し、更に各門は綱・目・科・属・種の順で次第に細分されていることは御存知の通りである。比較的下等な動物のうち分類の基礎単位となる種で新しいもの（いわゆる新種）が発見されるのは珍らしいことではないが、哺乳類のように比較的高等な動物で新種が発見されることは極めてまれである。まして多数の新種を含む全く新しい「目」と考えられる哺乳動物が発見されたというのだから信じられない程の大事件である。

一九四一年、日本軍の捕虜収容所を脱走したウウエーデン人ベテルスンシシエムトクウイストは文明人には知られていなかった南海のハイアイアイ群島の一つハイダダフィ島に漂着し、そこに棲む奇妙な動物に出遭った。この動物については、五十年前も前ドイツの詩人による作品にそれらしきものが書かれていたが、原産地も不明である。その後この動物について、プロメアンテ・デ・ブルラスという専門家によって詳しく研究され、その結果を、群島の一つにあるダーウィン研究所のヘラルト・シュテュンブケ教授が一九七二年出版し、一九八七年日本語訳が出版された。この動物は他には見られないような極めて特異な特徴を持った哺乳類で、体の構造・行動様式そして独特な生態型を備えている。なかでも特徴的な鼻の存在から『鼻行目(Rhino gradentia)』と名づけられ、その鼻の数・構造・機能などに基づいて、一四科・二六

属・一八九種に分類される哺乳類の新しい目として位置づけられた。シュテュンブケ教授の著書にはそれら各種について、動物学の専門的立場から詳細に記載されているが、読めば読む程、我が眼を疑いたくなる程不思議な動物である。ドイツのカールスルーエ大学のゲロルフ・シュタイナー教授による作図が多数掲載されているのでその中の三例を御紹介しよう。

さて、原著の原稿が印刷されようとしていた時、大事件が起こった。極秘裡に南太平洋で行なわれていた核実験の事故で大爆発が起り、全ハイアイアイ群島は海面下に没して消滅してしまったばかりでなく、たまたま来島していた鼻行類の国際調査団の凡てのメンバーも、多数の標本や記録と共に消えてしまい、今やこの動物に関するあらゆる手掛りが無くなってしまった。ここまでくれば、もう皆さん気づかれたと思うが、実はこれは完全に仮空の動物でフィクションであった。それにしても動物学的にはまことに専門的な立場で取扱われ、本当にそのような動物が存在していても不思議ではないようにさえ思われてくる。この島の地図を眺め、ダーウィン研究所が島の一つにあることなどを見ると、チャールズ・ダーウィンが赤道直下のガラパゴス諸島を訪ね、特異な動物達を調査して、自然淘汰説を考えて論拠の一つとしたことと、何等かの共通点があるような気がしてくる。（ヘラルト・シュテュンブケ『鼻行類』日高・羽田共訳 思索社一九八七年）

（かんばら しゅんいち・専任・自然人類学）